

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## まず、聞け！

人の素養で大事なことのひとつに、人の話を聞くことがある。だれしも自分の言いたいことをしゃべりたいものである。出来れば、話を聞くより話を誰かに聞いて欲しいと思っているものだ。

ところが言いたいことをじっくりと聞いてくれる相方を見つけるのは意外とむずかしい。夫婦や友人であっても話し相手にならず、ストレスをためる人が多いにちがいない。

私も客商売をしているからよけいに心がけなければならないのであるが、ついつい忘れて自分の言いたいことをしゃべってしまう癖がなおらない。先日、来店した七十歳ぐらいの婦人が「こんな高い服は買えんわ。金もないし…」と言う婦人に、私は「ひょっとして、お客さんは親や姑や舅さんなどの世話を嫌い、疎遠にされてきたのではないですか。人には面倒なことも、いいこともついてまわります。人との関係を切るとわずらわしいこともなくなります、いいことも切れてなくなります。お金も切れて飛んでいってしまうものです。おなじみさんを見ていて思うのですが、熱心に家族や身近な人を世話してきた結果、思いもよらなかった金や楽しみが回ってきているように思えます」と言ってしまった。

婦人は「もうおそいわね」と言って店を出て行った。その時「しまった！」と反省した。見ず知らずの客に対して失礼な物言いであった。

人間関係を大事にするには金も要るし手間や時間がかかる。出会った偶然の縁を殊の外だいじにする様子を多くの客から学んできた。世の中で無数に張り巡らせた人と人との関係にこそ人生の面白さがある。

先日の婦人に対しても、まず相手をほめることから始めるべきだったのだ。「ほめて気持ち良くしてから話をよく聞く」これが人との出会いの基本である。



連載 爺捨て山 17

梵店主

老いた男には哀れさが漂うが、女達にはそこぬけの明るさと快活さを感じる。この違いはなんなのだろうか？

先日の寄席でも落語家がまくらでしゃべって笑いを取っていたが、情けないやらあほらしいやら、男としては解せない。男は敗戦でさっぱり元気を無くし、給与の銀行振り込みで全く亭主の威厳が消えてしまい男であって男でないいい加減なものになった。

外見は男の責任をかぶせられながら、中身が無い故にもがいている。いっそ責任放棄でもして開き直れば晴ればれとするかもしれないが、男の看板だけはあげている。アメリカの南部などでは男尊女卑がまかり通っている。男は威張っている。レディファーストの国だから、さぞ女性達が優遇されているのかと思っただが逆だった。中東のイスラム諸国でも女性達は男に比べて大変だ。

およそ世界中の女性達で日本の女ほど恵まれている国はないように思う。これもひとえに戦争に負けたおかげかもしれない。もしも、戦争に負けていなかったら日本の男達は今ほど自信を無くすることはなかったかもしれない。

敗戦が未だ多くの問題を生み続けている。やはり戦争には負けてはいかん。

## ヒマラヤへの道 6

梵店主

昔、山で遭難すれば家の財産をなくすぐらい搜索費用がかかったので、誰もが山登りには反対したものだ。そんな影響

か知らないが、年配の山岳部OBには金持ちの子弟が多かった。ある先輩などは卒業してから就職したことがなく、一生遊んで暮らした。

よっちゃんらの世代になって山岳部もずいぶん様変わりした。貧乏人が増えたのである。そんなわけで海外遠征計画の資金集めに苦労するのは最初から分かっていったから、山岳部会長は「やめとけ、やめとけ」とよっちゃん達をなだめ論したのであった。そんな心配を無視して無理やり計画を進めた結果、やはり心配したとおり金を何とかしなければ出発出来ないのであった。

会長は常々よっちゃんに言っていた、遠征隊は日本を出発できたら半分成功したようなものだ。そこまで漕ぎつければが大変なのである。だからそんな大変な苦労をしてまで遠征しなくてもよい。

会長は靴を三足履きつぶすくらい会社廻りをして資金を集めた経験があるから、よっちゃんたちがやろうとしている計画の先に待っている困難を誰よりも

よく理解していたし心配していてくれたのだ。それにも関わらず、よっちゃんは耳を貸そうとはしなかった。よっちゃんは、何としても遠征をやる。この事以外を考えてはいなかった。金集めの事ばかり考えるようになっていた。

よっちゃんは、金持ちと思える先輩に寄付金の依頼を持ちかけたが相手にされなかった。数百万の金を一度に集めたいと思ったが無理だとわかった。金持ちといえども、金を簡単に出してもらえるわけではなかったのだ。人は元来けちで、自分の金は出来るだけ減らしたくない。他人の金ならいくらでも使えるが自分の金は使いたくないのが人情なのである。

この真理を理解するまで時間はかからなかった。自営業者を営む金持ちの先輩にとつては、会社の金も自分の金と同じであるから、使いたくない心理が働く。一方、大きな会社の雇われ社長は先輩であれば、会社の金は自分の金ではないから社内での合意が得られれば平気で使える。つまり手続きと時間がかかるが、この方法が正攻法であると思われた。

ところが、半年もない時間の中で如何に早く金を集めるかを、考えなければならなかった。

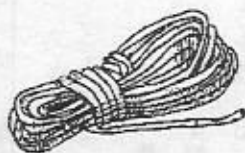
数百万の金を集めるといふ作業は、

一つの会社を創り、営業して利益を出して、すぐ解散するようなものがあるから、短期間の間にモノ凄いならビードでやってしまわなければならぬ。この作業をよっちゃんは最初から理解していたわけではなかった。

先輩達から相手にされず途方にくれているよっちゃんは、大学の校友会の事務所を訪ねた。はじめて訪ねる事務所は古びた小さな部屋に事務員ひとり年配の事務長がいるだけのわびしいものであった。隣の校友会館も古い木造であって寄付金をもらえそうには見えなかった。よっちゃんは、やや落胆しながらも事務長に今回の遠征計画についての説明と寄付金依頼をお願いした。

ヒマをもてあましていたのか事務長は熱心によっちゃんの話聞いてくれた。「ごらんのとおり、校友会には金はないから、寄付金は出せないが、熱心を見込んで頼みがある。実は、校友会名簿が古くなって新しく作りなおそうと考えている。校友会には金がないから名簿に協賛してくれる会社の広告費でもって出したい。手伝ってくれるか。集めた広告費の半分を手数料としてやる」

よっちゃんは、とつさに「やりま



#### 義兄とその家族(4)

袖の下として渡すお金をコンビニのATMにおろしに行つて病室に戻つたら、義兄の気が変わつていた。その間、約20分。姉がトイレに行つていて間にたまたま医師が回診に来た、ということしか、いまだにわからないのだが、恐妻家の義兄は「粒子線療法には行かない」という代わりに「僕の代わりに相談に行つてきてくれてもいいけど」と言つた。

本人に治療を受ける気持ちがないのに、相談に行つてどうなるというんだらう。姉と顔を見合わせた。姉の顔は黒ずんで見えた。怒り、落胆、不信：そんな諸々の感情をおさえつけた、世にも怖い顔。姉はだまつて帰り支度を始めた。

実の姉だから、私には姉の気持ちがよくわかつた。肺ガン、それもかなり進行したタチの悪い症状。手術もできず、抗ガン剤と放射線で叩くしか手立てがない。そんなガンから生還するたつた一つの可能性として、姉は先端医療の粒子線療法にすがりついて、この苦しい3カ月を何とか乗り切つた。たぐさんの検査、その結果が出るまでの重苦しい時間、しかも、よい結果など一つも出なかつた。そんななかで、姉は心の中で呪文のようにこうつぶやい

ていたに違いない。「大丈夫、大丈夫、○○(義兄)には粒子線療法がある。あれなら副作用もなく、元のようになれる」。

義兄と姉は食餌療法でも完全にスレ違つていたが、粒子線療法でも思いが全然、違つていた。セカンドオピニオンに医師が難色を示したからどうのこのの、ではなかつたのだ。

この日の病院からの帰り道、姉はいつもよりさらに疲れて見えた。義兄の洗濯物の大きな袋を肩からかけて、姉はいつものように私に「バイバイ」と言つた。私は、よせばよいのに、振り返つて姉の後ろ姿を見てしまった。夕方、寒い風が吹いていて、姉は細く、小さく、哀れに見えた。涙がこみあげてきたので、あわてて地下鉄の階段を降りた。

それから4日間、姉はストライキに入つた。病院に行くのを止めてしまったのだ。姉は私には言わなかつたが、家で一人できんざん泣いたのだと思う。7月に転勤先の四国で病院に入つてから、姉は義兄に付きつきりだった。子どもは独立して家庭を持つていて、し、専業主婦の姉は義兄と二人三脚のような人生を送つていたから当然なのだ、そこへ食餌療法が加わつたものだから、姉はそれこそ朝から晩まで、病人にかまけていた。それをぶつたり

と止めてしまったのだ。

姉は風邪を引いたような声で電話をしてきた。「乳ガンかどうか診てもらいに近所の病院に行つてくるわ」。実は、少し前に、「ちよつと、しこりがいいか、みてくれへん」と言われて、私はおつかかなびつくり姉の乳房を触つてみたのだが、それらしいしこりはいから触つても感じられず、「ガンではない、と思うけど、早く病院に行つてえや!」と言つていたので。案の定、姉は乳ガンではないことがあつさり」と判明してホツとしたのだが、その次の日、姉は「歯医者に行つとく」とまたしても、義兄の病院をパスした。

結局、5日目に義兄が「ハミガキがないんだけど」と電話をかけてくるまで姉のストライキは続いた。森ノ宮の成人病センターには売店のほかコンビニまであるし、義兄は治療に入る前でも自分で買えたと思うが、ハミガキが白旗の役目を果たして休戦。姉はまたセッセと毎日、病院にニンジンジュースや飲料水、義兄の好物で、体に良いと姉が信じているソバなどを運びだした。

このころの姉は「異常」だった。たとえば、義兄に飲ませる飲料水は「六甲のおいしい水」でなければ、とこだわつた。理由はこれ以外の国産のもの

は熱処理をしていて水本来の力が失われているから、だそうで、しかも「500ミリリットル入り」の小さいペットボトルに限定。理由は「2リットルのペットボトルでは飲みきれない。冷蔵庫に入れても劣化するし、冷たいと体を冷す(ガンの義兄にはもつてのほか)」。私が姉を異常だと思つたのは、姉がこう言つたからだ。

「店に並んでいるのは、蛍光灯の光りに当たっているから、なるべく買いたくないねん。箱に入っている状態で買いたいねん」。私が呆れかえつて「なに、それ!」と文句を言い掛けたら、姉は「ガンじゃなかつたら、私かてそんなことまでは言えへんで。でもな、○○(義兄)は今、生きるか死ぬかやねん!」と私を封じ込め、「アンタ、箱単位で売つてるとこあつたら買うといてな」と頼まれた。

仕方がないので、近所のスーパーで年配のエライさんらしき人をつかまえて「開封前の箱の状態で売つてもらえませんか、お見舞いしたいんです」と頼み込んだ。それを「2本ずつ病院に持つて来てな、いっぺんにではなく」。姉はこの時期、完全に異常だった。(A)



詩

杉本真維子という若い詩人が信濃毎日新聞の文化面に連載してきた「詩の森を歩く」が、最終回を迎えた。毎回一篇の詩とエッセイをつづつたもので、最終回は、谷川俊太郎の言葉を引 きながら詩と読者の関係についてふれ ていた。詩を読むうえで、たいへん示 唆に富んだ最終回であった。

谷川は詩を楽譜に例えたことがある という。譜面の前にすわる演奏者は読 者であり、読者が譜面を見ながら演奏 することで、詩は、書き手との共作の ように奏でられる。楽譜の読み方を知 らない人にいきなり楽譜を見せても演 奏できないように、詩もいきなり読ん でわかるものとは考えないほうがよ い、と。楽譜を読むために少し勉強が 必要のように、詩も読むために勉強が 必要だということである。

そこで杉本はいふ。文章と同じ感覚 で、意味だけ追って読み進めようとし ても、わかるものではない。詩という ものは、意味、改行のリズム、語感、 表記、余白の視覚的効果など、さまざ まな要素から形づくられているので、 文章と同じようには読めない。絵画に 接するときのような、眺める、という 感覚のほうが、むしろ近い、と説明す る。

さらに、詩は、経験というものをぜ んぶ脱ぎ捨てること求め、生まれたば かりの赤子のような瞳で世界を見るき っかけを喚起するものだ。そして「そ ういうものが、簡単であるはずがない と、勇気をもって言ってしまう。で も、だからこそ、まだ一度も出会った ことのない、瑞々しい自由が、優れた 一篇の詩のむこうには、必ず、待つて いる」と結んでいる。

僕は詩を読んでいて、「わけわから ん」と、投げだしてしまふことが多い。 どうしても意味を追ってしまふのだ。 詩を読む勉強が足りないのだ。詩人の 散文は味わい深いと思うことはしばし ばあるのだが、詩となると、どうもい けない。詩の素養が欠けている。 二年ほど前だが、詩人が小説を書い て高い評価を得るといふ新聞記事があ った。少し古いところでは富岡多恵子、 伊藤比呂美がいる。最近では、小池昌 代、蜂飼耳、日和聡子といった若い女 性詩人が詩と小説の世界を往還してい るらしい。詩と小説の違いは何だろう か。蜂飼は「音やリズムを重視し、言 葉そのものを追求して、空白の部分 を軸に書き進めるのが詩。言葉で空間を 埋めていくのが小説」と説明する。日 和は「内容に応じて詩か小説かおのず から決まる。池に浮かんだ飛び石をば んばん飛び渡って表現するのが詩とす

れば、小説は石の間の水の中も歩いて 示すような感じでしょうか」と語って いる。伊藤は「そこに植物があれば、 描写はいくらでもできる。でも、その 植物が立ち上がって何かをしないと小 説にはならない。私は時間の経緯を書 くのが苦手だった。詩のほうが自由に なるんです」といって、詩に戻って きた。

辻まことという、なんともユニーク な生き方をした人物がいる。人物像に ついては省くが、収まりどころのない 男だった。一九七〇年代前半に発行さ れた山岳雑誌『岳人』の表紙絵を描い た人である（かといって、画家ともい えぬ）。その辻が詩について、次の ようにいう（詩人といえなくもない）。 人のもつ疑問で、ブルタニカとかラ ルースの百科事典に解答を期待できな い性質のものがある。さまざまなる事 物が自分を刺激して過ぎ去り、問題を残 してゆく。解答を得ようとするが、せ いぜい近似値を得るにすぎない。そん な重荷を背負った意識はしばしば他人 の努力に救われる。芸術がよりどころ となるのである。詩とは、そういうデ イクシオネエル（辞書）の一冊を意味 する。詩は、言葉によって解答してく れるものうち、もっとも賢明なもの であろうと辻はいうのである。

うとするとき、もっとも愚かな方法が 論理にたよる方法だと断言する。体系 的哲学が示すように、言葉でダイテイ ルを追いかければ追いかけるほど、本 質から遠ざかるというのだ。詩は、ず つとよく「生命」をとらえる、と。

辻は「かつこう」という詩に出逢い、 衝撃を受ける。作者はそれまで姓名さ え未知だった金子光晴だ。自分が模索 していたものをこの詩がみごとに表現 していたのだ。「この詩人は、いつ私 の心から、この言葉を盗んだらろう」と いう嫉妬を起こすほどだった。

金子光晴は、僕のもっとも好きな詩 人だ。詩ではないが、金子の『マレー 蘭印紀行』や『どくろ杯』などは絶品 だと思う。また、その生きさまが凄 い。 茨木のり子は、金子の詩人としての 特質として次のように述べる。「日本 語のツボの在りか、その押さえかたを、 憎いほどよく心得ていた人だった…… 金子光晴の作業は、日本語に歓喜の声 を挙げさせている。これもどこか女を 扱う手つきに似ていなくもない」。 詩「かつこう」を読んでみよう。（獲 しぐれた林の奥で かつこうがなく、 うすやみのむかうで こだまがこたへる。 すんなりした梢たちが

しづかに霧のおりるのをきいてゐる。  
その霧がしずくになつて 枝からしと  
しと落ちるのを。

霧につづいてゐる路で、  
僕はあゆみを止めてきく。  
さびしいかつこうの声を。  
みじんな水の暮をへだてた  
永遠のはてからきこえる  
単調なそのくり返しを。

僕はじぶんの短い生涯の、  
ながかつた時間をふり返る。  
愛情のまばらたつた  
うらぎりの多かつた時を  
別れたこひびとも  
ばらばらになつた友も  
みんなこの霧の中に散つて  
この霧のなかにゐるのだ。  
もう さがしやうさへない。

はてからはてまで  
みつみつとこめる霧。  
とりかへしつかぬ淋しさだけが  
非常なはやさで流されてゐる。

霧の大海のあつち こつちで、  
よびかはす心と心のやうに、  
たよりあふ心のやうに  
かつこうがないてゐる。  
かつこうがないてゐる。

## 高槻について考える その2

敷島旭

高槻からは多くの有名人が輩出して  
います。政治家、財界人、芸術家、ア  
スリート、芸能人などあらゆる分野の  
方々です。一番記憶に新しいところで  
は、バンクーバー・オリンピック代表  
の織田信成選手がいます。フィギュア  
スケートで日本のエースを争う程の選  
手ですが、この大会では、演技中に靴  
紐が切れてしまうというアクシデント  
に見舞われ、七位でした。七位でもす  
ごいのですが、靴紐が切れなかつたら、  
きっとメダルを獲っていたでしょう。  
でも、織田選手にはまだまだ未来があ  
ります。選手として、そしてゆくゆく  
は指導者としての未来です。

高槻出身の有名人のすべてについて  
この欄で触れるわけには参りません。  
今回は、私が昔から関心をもっていた  
大宅壮一氏について少し述べたいと思  
います。大宅氏は一九〇〇年に生まれ、  
一九七〇年に没した気鋭のジャーナリ  
ストであり、社会評論家でした。正直  
なところ、その功績については、私は  
多くを知りません。しかし、成しえた  
仕事は膨大であり、日本の政治・社会・  
学術に与えた影響もまた強烈であつた  
ようです。氏は、社会や時代をひと言

の造語で的確に表現する能力にも長け  
ていました。「ロコミ」や「恐妻」「駅  
弁大学」など、いずれも、聞いている  
方が「なるほど」と膝を打って納得す  
る感じの言葉です。

それらの中でも、一番、時代を風刺  
し、社会に警鐘を鳴らした言葉として  
「一億総白痴化」という言葉がありま  
した。これは、テレビ番組の低俗性に  
よつて、視聴者が考える能力を失うこ  
とを危惧して述べた言葉だつたよう  
です。時に為政者が、国民をコントロー  
ルしやすいように、意図的にテレビな  
どのメディアを利用することもあると  
言う意味も込めていたのではないかと  
私は解釈しています。(注：白痴という  
言葉は、現在、人権的視点から放送禁  
止用語になっています。しかし、ここ  
では敢えて時代を鋭く突く言葉として  
使わせて頂きます)

大宅氏の想像は今現実化しているの  
ではないでしょうか？ 近年、どの放  
送局の番組を見ても、芸をもっている  
とは言いがたいタレントと称する人々  
が出ていて、低俗な「トーク」とやら  
で視聴率を取ろうとしています。何が  
低俗かと言え、すぐに節度の無い男  
女関係の話、浮気・不倫がさも日常的  
に誰もがしているように言う話……、  
これらを中学生や高校生が聞いていた  
ら、それが当たり前なんだなあ、と聞

違つた認識をしてしまうと思われ、心配に  
なつてきます。最近、体験の低年齢化が  
進み、その子供たちの間に性感症が拡が  
り、また青少年の男女関係による事件も多  
発してきていますが、このような低俗なテ  
レビ番組の影響もあるのではないでしょ  
うか。

とは言いながら、テレビの役割もまた認  
めなければならぬ面も感じます。確かに  
「一億総白痴化」という危険性をテレビは  
有するものですが、またテレビの報道を通  
して、政治や社会、経済の情勢を知ること  
にもなつています。もちろん、その報道も  
すべてを信じてよいというものではない  
でしょうが、国民は、政治や社会、経済の  
動きを知り、自らの判断により、選挙の時  
に唯一の参政権を行使します。

昨今の、政治状況は如何でしょうか？  
時々、報道番組で記者が街行く人々に、今  
の政治について意見を聞いています。マイ  
クを向けられた人々が発する言葉を聞いて  
いると、まだまだ国民は「白痴化」して  
いないことを感じ、ホッとする時がありま  
す。政治家はこのことをしっかりと胸に刻  
み、頭に叩き込んでおくべきでしょう。高  
槻出身の有名人を調べていて、そんなこと  
に思いを馳せてしまいました。



「手紙2」

『手紙』(歌)に次のような一節がある。  
『よやがて歯も弱り、飲み込むことさ  
え出来なくなるかも知れない』  
かもしれない、ではない。必ず、そう  
なる。

母を連れて初めて老人ホームを訪れ  
た時、介護士が入居者に緑色のどろり  
と液体を飲ませていた。

「それ、何ですか」と聞いた。

「誤嚥しないようにお茶にトロミを付  
けたものです」

「誤嚥って？」

「食べ物や誤って気管支の方に飲み込  
んでしまうことです」

「へー、そうなんですか」と驚いた。  
《人間はそんなにまで衰えてしまうの  
か》と。

それでも《ひとによりけりなのだろ  
う》ぐらいに思っていた。

しかし、そうではなかった。八十九  
歳で老人ホームに入居した母も三年ほ  
どで飲みものにはトロミを付けなくて  
はならなくなった。水やお茶を飲むと  
激しく咳き込む様になったためだ。

「誤嚥は肺炎を誘発し、死につながる。  
老人の死因の中で最も多い」と介護士  
から説明を受けた。

誤嚥の原因を調べたら、老化で唾液

が少なくなるのと飲み下す速さに気管  
の蓋がついていけなくなるため、だそ  
うだ。

予防するには次の様に口の運動をす  
ると良い。

①頬を膨らましたり、緩めたりする。

②舌を出したり、引っ込めたりする。

③舌を出して上下左右に動かす。

その他、良く噛んでゆっくり食べる  
こと、黒コショウの匂いを嗅ぐことも  
誤嚥を防止するとも言われる。

健康で長生きする為には『健口』でな

くてはならない。誤嚥を知って以来、

私は折に付け、健口体操をしている。

(籠)



◎あごの下から耳の付け根あたりへ、こ  
すりあげるようなマッサージをくり返す  
と、誤嚥が多少抑えられる。いろいろな  
予防法があるが、誤嚥は完全に防止する  
ことはできない。とくに注意しなければ  
ならないのは、誤嚥を引き起こす肺炎だ。  
雑菌の巣窟である口内をできるだけ清潔  
に保つておくことが大切である。私は朝  
晩二回、歯磨きと舌苔の除去、口内全体  
の掃除は欠かさない。(猿)

田中先輩と私 4

梵店主

田中さんがタイの奥地の少数民族を  
訪ねるようになった動機は、タイより  
もさらに奥の、入城がひじょうにむず  
かしいビルマ山地に入りたいたため  
だ。カカルボラジというビルマ最高峰  
を登るためでもあったが、むしろ文明  
化した日本の社会が嫌になったとい  
うのが本当ではないかと私は思ってい  
る。

山男と言われるとたくましい男を想  
像するが、実際は普通の男達よりもは  
るかにシャイで純朴な人間たちなので  
ある。

他人を蹴落として出世していくよう  
な精神的なタフさはなく、素朴なやさ  
しさを大事にして仕事や生活を送れる  
ような人生を選択しているように思え  
る。田中さん以外の親しい先輩も実業  
界でバリバリやって儲けているような  
人は、むしろ例外であって大半は真つ  
当な仕事を選んでいる。

田中さんがよく言った。

「世界には二百を超える少数民族があ  
るが、その多くが裸族だ。衣服を身に  
まとわない裸のまま生活している民  
族だ。彼らは、狩猟や採取をして移動  
して暮らしている。裸族は文明化され  
ていない。衣服を身につけるところか

ら文明化が始まる。我々は先進国家の  
誰もが衣服を着ているから裸族は少数  
だと思いがちだけれど、民族でかんが  
えれば、裸の民族の方がはるかに多い。  
しかし、その少数民族は年々消えてい  
っている」

田中さんの目線の先には、現代の文  
明が素朴に暮らす先住民を横暴に追い  
払い消し去ることへの深い懐疑の思い  
があった。長い年月営々とくらしを営  
んできた人々を未開人と呼び都市住民  
に同化させようとする潮流に対する憤  
りが強かったと思う。その止める事が  
出来ない時代への反抗とも言えそう  
な気概とやさしさが、数十年に及ぶタ  
イ奥地への巡礼とでも表現できそうな  
行動となったのであろう。

アカ、カレン、リスなどの少数民  
族は周辺の中国・雲南やチベット、ミ  
ヤンマーなどから流れて密林の山中で  
暮らすようになった。民族の差はある  
が、大半の民は高床式の粗末な小屋で  
暮らし、テレビも水道もない生活であ  
る。田中さんが行き始めた頃は、原始  
的な自給自足の生活であった。豚と犬  
が庭に放し飼いされた様子の写真を見  
せてもらったものだ。

私は、何が楽しくて田中さんが奥地  
へ行くのか不思議に思った。日本の山  
奥ではなくて、はるか遠いタイの奥地  
である。

## 「偶然をチャンスに変える」

明石幸次郎

サラリーマンは、自分が出世街道から外れたりしたら、自分の実力と努力は棚に上げて、自分の運の悪さを恨んだり、周りの人達、取り分け自分を引き立てる立場にある上司の所為にして、自棄酒を煽ったりして、その後の会社での人生を無駄にする事が多いものです。そういう私もその内のひとりでありました。

アメリカのクルンボルツという心理学者によると「人生で成功を勝ち取り、幸福を手にした人の人生を調査したところ、その人生の節目節目の出来事、ターニングポイントとなった要因の実に80%が本人には思いもよらなかつた偶然の出来事や出会いによるものであった」ということです。本当の幸福と成功を手に入れた人の大半はそれにふさわしい努力をしてきた人です。コツコツと努力を重ねていくことは、どんな人生を送りにしても大事な要素ですが、それだけ努力したからといって、必ずしも真の幸福や成功を手に入るとは限りません。

クルンボルツの調査でわかったことは、本当の幸福と成功を手に入れている

人は、確かに、さまざまなラッキーな出来事や出会いに恵まれた人であったということですが、そういう人は、ただポーツとしていたら偶々ラッキーに出会ったのかというと、そうではないようです。

自分を幸福にしてくれる偶然(ラッキーな出来事や出会い)が起きやすい考えや価値観を持ち、それにふさわしい人生への構えをとり、具体的な行動を取っていたということが大事な点です。一見ラッキーな出来事や出会いであるように思えても、実は単なる偶然によるものではなくて、その人自身がラッキーな出来事が頻繁に生じるにふさわしい考えや行動をとり、生き方をしていたことによるものだ、ということです。

真の幸福や成功を収めている人の多くは、自分に幸福や成功を与えてくれるような出会いや出来事に心が開かれていて、心が動いたらすぐに行動出来る、と言う特質を持っているようです。言い換えると、持ち前の好奇心とオープンな囚われない心、積極的な行動力を持って、しかも何よりも「自分がこういう人生を送りたい」という強い情熱をもっている人で、更に大事なことは人間としての可愛さ、愛嬌も大事かと思えます。これは、クルンボルツは言っていないが。

最後になります。クルンボルツによると、偶然を味方に付け、幸福な人生を築き上げていくための鍵は、次の五つにあると言っています。

- ① 好奇心(常に好奇心のアンテナを張っておく)
- ② 持続力(粘り強くやり遂げる、失敗しても成功するまで諦めない)
- ③ 柔軟性(オープン・マインドを持ち、計画に余り囚われない)
- ④ 楽観性(何とかなるといった人生への肯定的な姿勢、自分の人生を信じる)
- ⑤ 冒険心(リスクを恐れない生き方、敢えて一歩を踏み出す勇氣をもつ)

人生は結構長いものです、私は今、第二のサラリーマン人生を送っていますが、これとて、優秀な友人が紹介してくれたもので、自分にとって相応しい仕事かどうかは別にして、友人との出会いを大事にして「取り合えず、YES!」ということ引き受けました。自分が役立っているかどうかは分かりませんが、当にクルンボルツの説を実践して成功を収めているこの友人の後ろ姿を見習いたいと思いつながら、日々馬蹄を重ねているC級サラリーマンです。

## 俳句

幸枝

- 如月の身を切る風や橋渡る
- 淡雪に暫く見とれ人もなく
- 日がさして名残りの雪に水ゆたか



## 編集後記

これまでの巻頭エッセイを編集しなおした和とじ本を発行します。里山の想いなどを綴った冊子です。気楽にお読みいただけます。

これから、少しずつこれまで掲載した文を冊子にして残していければと思っております。

不景気の風は一向に止む気配はありません。近隣の中国・韓国などの人々の賃金が日本と同じぐらいになるまで不景気は続くのではないかと考えています。大変長い収入減の坂道を下っていくわけです。

そういう状況の中で、これまでないがしろにされてきた農村とシャッター通りと言われて久しい商店街。この二つは妙にリンクし似ています。これらの活性化なくして明日の日本は無いとさえ思えてきます。



甦る記憶

四季の変化を見ると何かを書いて友へ送り、暮らしぶりを知りたいと思ひ、いろいろと試してみる。元気に田舎で自然と戦っている人は違う。

やがては、小学生時代の追憶となり、服装、髪スタイル、戦前、戦中、戦後を暮らしてきた人達は強いというけれど、何事にも耐える気力があるという。つまりぬ愚痴を言っている人はいつまでも伸びない。「なんとかなるさ」という気分です。立ち向かえば、きっと何かが見えてくる。

母は、染物が好きで古い着物を染めて仕立て直しを依頼して、ハンテンになったりチャンコになったり変化していった。

染物の染料が何かは未だに私にはわからない。母が液をつくり、型紙があり松葉の型、梅の花、トンボ。「模様によって染液が違ってくるのだから、一回教えたからおぼえとき。何をさせても不器用なんだから」と母から何回も怒られた。けれども私しか手伝わないんだから、妹や弟は、米ゴマ、写し絵なんかに興じていた。ときどき染物を拵げている上に米ゴマを飛ばしたり、踏んだりして、怒られていた。



その染物を冬の寒い日、言えば農閑期、雪に閉じ込められたら、母はいろいろ型紙を作って考えがまとまったら、ぼつぼつ準備にかかり畳の上に布をひろげる。

今のようにストーブなんて無い。囲炉裏の火も消えている。夜しか火をつけないのだから手がかじかんで型紙を拵げるのもイヤ。母は怒る。指図通りに従う。テキパキと母はや。身頃のどの辺りに型紙を置くか。決まれば染液を塗ってゆく。

時間をおき、やがて部屋の間は布がいつぱい下がってゆく。子ども頃だから後は覚えていないけれど、染め上がった着物になりチャンコになったのを私にさせて満足していたのを思い出す。

朝から牛井

その中の着物柄を一枚だけ嫁入りを持ってきたけれど「田舎もん」という姑の一言で、思い出の着物は、

どこへいったのやら。未だに思い出せない。

青春とは人生のある期間ではなく心の持ち方を言う。

吉野家の牛井をいつも我が家という記事を横目に見て、毎朝六時すぎには店の前を犬を連れて歩く。そうすると、わびしくサラリーマン風の紳士が井をかかえるようにして食べて居られるを見て、何んとも言えない気持ちになる。おせっかいな気持ちを起こすな、本人はいうまでもなく、いろんな事情があるのかも。

店の若衆もニコニコして、お茶を出している。フツと我に返って、朝っぱらから牛井といくか？ たつぷり煮込んで味がしみこんだ牛肉をご飯の上のせるだけ。あの光景を見て無情に牛井が食べたくなかった。

アイデア次第で、肉じゃが、肉うどん、すきやき、たまごとし、自分なりのアレンジを加えた楽しみ方してみよう。

頼み事はハッキリと

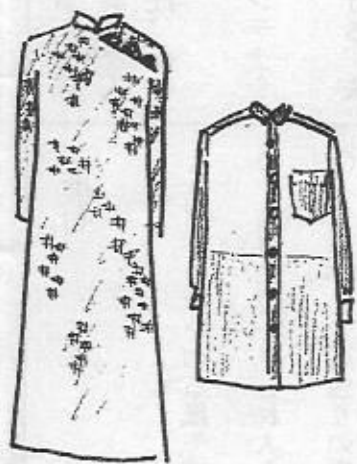
最近「地域の力」や「近所の力」という言葉をよく耳にする。確かに一人では何も出来ないし、まわりの人たちと協力し合わなければ生きていけないこともある。

「遠くの親戚より近くの他人」といわれるように周りの協力は大きな力になる。でも考え方によっては、他人に「できること」「できないこと」「頼めること」「頼めないこと」がある事も知っておくことも大事。

いつもより長い時間家を空ける事もある。「ガスの元栓を見てくれない？ ストーブ消しているか。」そういった内容を依頼するけれども、頼まれた人は迷惑。勝手の知らない家の中だから。頼み事をする際には、内容をはっきり伝える事が先決。頼まれた側も、それ以外はしないという配慮も大切。あいまいさは、時には事態を悪化させ良好な関係を険悪にすることもあるので。

夏物お仕立てセール

着物地の絹、紗、麻から涼しい洋服を仕立てます



☆☆☆

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~